

## プレイセラピーと箱庭にあらわれるこころの次元 —神経症児童と自閉的児童との相違—

堀 江 桂 吾\*

### Dimensionality of the Mental Functioning Expressed in Play Therapy and Sandplay —Differences Between the Neurotic Child and the Autistic One—

Keigo HORIE\*

#### 要約

著者は、精神分析的な観点に基づいて箱庭を使用したプレイセラピーについて論じた。臨床素材を通じて、神経症児が投影を用いて内的対象関係を表現し、4次元の心的世界に生きているのに対して、自閉的な児童は、内的空間を有しておらず、2次元の世界に生きていることが明らかになった。しかし、自閉的な児童であっても、精神分析的なプレイセラピーの経過で、空間と時間を備えた次元性を獲得することが出来るようになることが示された。

The author discussed the play therapy and Sandplay processes on the psychoanalytical point of view. He extracted two clinical vignettes, one was about the neurotic child and the other was about the autistic one. The neurotic child could project his internal object relationships. He had been lived in four-dimensional relations. On contrary, the autistic child has no internal space. He had been lived in the two-dimensional relationship. But through psychoanalytical play therapy, he acquired the dimension of space and time continuing.

#### 1. 子どもの心理療法としてのプレイセラピー

本稿は、精神分析的な人格理解に基づいた子どもの心理療法を素材とする。そのために、まずは精神分析の世界における子どもの治療、すなわち児童分析の歴史を概観することから始めたい。精神分析だけでなく、広く心理療法全般の歴史を振り返っても、子どもを対象とした治療の先駆者が Anna Freud と Melanie Klein という2人の女性であることは間違いない。彼女

たちは、医師でも心理学者でもないが、1920年代に子どもを対象とした精神分析に着手し、その道の先達として多くの人材を育てた。

元来、Sigmund Freud が成人のヒステリー患者を対象に築き上げた精神分析は、無意識に触れるための媒介として、自由連想という言葉表現を用いることを前提としていた。S. Freud は、精神分析を通じて成人の心のなかに子どもの心が生きていることを発見し、それが印刷原

---

\*駒沢女子大学 非常勤講師

版（1912/1970）のように生涯幾度も繰り返されていると考えた。そのような大人の中の子どもの心が分析家を相手に展開することを、S. Freud は転移と名づけた。

しかし、S. Freud やその娘である A. Freud にとって、エディプス・コンプレックスを通過する前の実際の子どもは、まだ現実的に親の庇護の元にあるために、分析家に転移を向けるとは考えられなかった。よって、A. Freud（1922-1935/1981）にとって、子どもと遊ぶことは、本格的な精神分析を開始する前の導入期という位置づけであった。そのため、陽性転移の確立と、親に対する教育や指示がその介入の中心となった。

しかし、これはあくまで理論的な観点からの理解と言える。Klein（1923/1983）は、実際に子どもを対象とした精神分析を実践し、子どもが遊びを通じて、分析家に向けて転移を展開することを身をもって経験した。子どもが母親の乳房や父親のペニス、あるいは自分の口やお尻などを介した、とても具体的で生々しい空想を育んでいることを目の当たりにした Klein は、それらを早期エディプス、部分対象関係という概念によって理解し、S. Freud の精神分析を深化させた。Klein にとって、子どもの展開する遊びが、言語表現よりも直接的に無意識の世界を表現しうるものであることは自明であった。

Klein にとって子どもの遊びは、大人の自由連想や、大人がカウチの上で報告する夢と同義であった。よって、陰性転移も含めた解釈と、セラピストが中立的な立場を維持することが技法上重要視された。これは、S. Freud 以来の精神分析の方法を、より忠実に子どもに適用する事を意味した。そもそも S. Freud（1914/1970）自身が、転移が思い出されて言語表現される代わりに、行動として繰り返されると明瞭に主張していた。つまり Klein は、S. Freud の手が届

かなかった子どもの心に対して、転移の理解と解釈を用いて深く探索し、重要な貢献をしたといえる。

A. Freud と Klein という 2 人の先駆者は、どちらも自らが S. Freud の正当な後継者であると主張した。しかし、2 人の相違点は著しく、ほどなく「大論争」につながった。この議論は、最終的には反発しつつも相互を排除することなく並存する道に向かった。その道のりで生じたことは、互いの方法を尊重し、有意義と認めることは取り入れる、という建設的なプロセスだった。例えば、A. Freud 以降の自我心理学は、子どもの遊びに意義を認めるようになり、解釈的な介入を取り入れた。また、Klein の弟子からなる Klein 派も、親との連携をそのスタイルに含みこんだ。

さて、自我心理学の立場に立つとしても、Klein 派の立場に立つとしても、子どもが自分の空想や体験を表現しやすい媒体を用意することが精神的なプレイセラピーにおいて不可欠である、という点では一致している。そのため、精神的なプレイセラピーで使用される玩具は、家族人形、動物、ミニカー、鉛筆、消しゴム、画用紙、粘土などが中心となる。子どもが現実世界と心理療法とを混同することを防ぐため、キャラクター物の使用は避けられる。また、使用される玩具類は、叩いたり投げたりしても壊れないよう、頑丈で、安全なものが推奨される。そして使用される部屋は、広くなくてもよく、水を利用したい子どものために水道が用意される場合もある。

## 2. 箱庭という媒体

砂箱とミニチュアの玩具、すなわち箱庭を用いる心理療法としては、スイスのユング派心理療法家 Kalf によって創始された「砂遊び療法」Sandplay Therapy が有名であろう。しかしそ

れ以前にも、箱庭を用いた心理療法は行われていた。1929年、イギリスの小児科医 Lowenfeld は、砂を敷き詰めた四角い箱とミニチュアの玩具を用いた子どものための心理療法を考案した。彼女はそれを「世界技法」World Technique と名付け、発展させた。Lowenfeld は自らの「世界技法」について、子どもの心的、情緒的経験が直接的に表現されると考えており、そこに理論的な見解を押し付けることは不適切であると考えていた。彼女の「世界技法」は、その後、スウェーデン、オーストリア、スコットランド、オランダ、スイスなどに広がった。

そのうち、スイスで Kalf によって発展させられた心理療法が、「砂遊び療法」である。Kalf は、「世界技法」を用いた心理療法によって、ユング派が重視するところの心の深層における変容や個性化が進むと考えた。これは、特定の理論的な見解を用いることに控えめであった Lowenfeld とは相容れない視点であった。

2 人は互いの理論的な相違について議論し、同じ媒体を用いる心理療法であっても、互いが異なる名称を用いることで合意した。つまり、Lowenfeld は「世界技法」というこれまでの名称を使用し、Kalf は自分の心理療法を、新たに「砂遊び療法」Sandplay Therapy と名付けたのである。この「砂遊び療法」を日本に導入し、「箱庭療法」と名付けたのが、ユング派心理学者の河合隼雄（1969）である。河合は、砂箱とミニチュア玩具による表現が、「箱庭」、すなわち、ミニチュアを用いて砂箱の中に風景を作り上げる日本古来の表現方法と似通っていることに気づき、「箱庭療法」と名付けた。「箱庭療法」はユング派分析心理学の理論に基づいており、セラピストには、クライアントの内的イメージの流れを守り、はぐくむ治療的態度をとることが求められる。そのため、セラピストの沈黙が重視され、解釈は差し控えられる。

さて、ここで明らかになったとおり、箱庭という媒体は元来、特定の理論に限定されたツールではない。「子どもが自分の空想や体験を表現しやすい媒体」という意味では、精神分析的なプレイセラピーにも十分適用できるものである。本稿では、精神分析的なプレイセラピーを臨床素材として取り上げるが、上記理解に基づき、箱庭という媒体も重要なツールとして用いている。その有効性は、本稿を通じて読者にも十分理解されるものと考えている。

### 3. 子どもの心の発達に関する精神分析的な理解 Klein Meltzer

幼い子どもとの児童分析の経験は、Klein に様々なことを教えた。例えば、子どもにとって母親の乳房や父親のペニスが、きわめて具象的に欲動の対象となっていること、それらがとても良くないものとして体験されており、子どもはそれを自分がもっていないことに苦しみ、羨ましさを故に攻撃・破壊せずにはおられないこと、対象を破壊してしまった罪悪感を感じることを恐れていること、いっそ対象に厳しく処罰されることを求めてしまうことなどが挙げられるだろう。

このように、Klein が理解した内的対象関係というのは、乳房、ペニス、肛門、口などが、ミルク、尿、糞便などを食い尽くしたり、吐き出したり、奪い合ったりする、具象的な心的体験である。そして、肛門的・尿道的衝動から生じた危険な排泄物を、自分の中から追い出し、母親の中へ追いやろうとする空想が投影同一化である（Klein, 1946/1985）。内的対象関係にせよ、投影同一化にせよ、Klein の主張は、実際に子どものプレイ・セラピーを行ったことのない人々には荒唐無稽に聞こえるかもしれない。しかし、Klein の言葉の背景には、児童分析での経験、子どもの遊びを通じて生々しく表現さ

れた豊富な素材があると言うことを忘れなければ、想像を膨らませ、理解を深める余地は十分にあると言えよう。

さて、投影同一化という概念は、成人の精神病者の精神分析を实践した Bion (1959/1993) や Rosenfeld (1971/1993) など、Klein に教育を受けた分析家たちによって精緻化された。彼らは投影同一化という概念を「患者のこころの一部が、対人的な圧力を通じて分析家に投げ込まれ、分析家が、それに近い情緒・思考を実際に体験する」という意味に拡張し、その交流的な側面を強調した。こうした理解は、必然的に治療関係に援用され、逆転移を通じた患者理解や、コンテイナー／コンテインドといった概念を精神分析に持ち込む礎となった。そして、分析家と患者との間で営まれる無意識的な交流が精神分析の本質に大きく寄与している、という潮流が生み出された。

一方、Klein 派と呼ばれる分析家達は、成人の精神病患者だけでなく、自閉症の児童に対する精神分析にも果敢に取り組んだ。なかでも特に重要な理論的貢献を行った分析家として、Meltzer が挙げられるだろう。彼は、独自の心的次元論を提唱し、自閉症、精神病、神経症では体験している心的次元が異なるということを指摘した (Meltzer et al., 1975)。

ここでは、Meltzer、および Cassese (2001/2005)、本部 (2006) に基づいて心的次元論について概観する。そもそも次元とは、幾何学で使用される用語であり、0 次元は点、1 次元は線、2 次元は平面、3 次元は空間から成立する。Meltzer はこの次元という概念を心の理解に導入した。

まず、1 次元的世界には、中心となる自己から、原初的な対象としての母親の乳房、あるいは乳首に向かう直線的な関係性しか存在しない。そこには、象徴形成などの心的活動を営む空間

が存在しないため、彼は、これをマインドレスと名付けた。そこでは、対象との出会いは偶発的であり、過去から未来に流れる時間の流れは存在しない。中核的なカナー型の自閉症者は 1 次元的な心的世界に生きていると言える。

続いて、2 次元的な心的世界では、自己と対象の表面だけが経験され、内的空間が欠けている。つまり、1 枚のカードのように裏と表しかない、平板な世界である。対象表面の官能的な性質が重要な意味を持ち、対象表面にへばりつくという、附着同一化という特殊な同一化を行うことが特徴である。例えば、自閉症の児童や、自閉的な傾向がある子どもが、手の向きを反対にしてバイバイをすることが少なからず見受けられる。こちらが手を振った時に、手の平を自分自身に向けながらバイバイする姿を目の当たりにすると、そのバイバイが手を振ってくれた相手に向けられたものではなく、今まさに自分に向けられた行為の再現であることが見て取れる。そこには、手を振る相手が心という空間を持ち、そのなかに別れを惜しむ気持ちが収納されているというイメージはほとんど無いように見える。さらに言うなら、手の平を自分の方に見せて手を振る姿からは、別れを惜しむ気持ちが発信されているようには見えず、今見せられた動きを表面的に模倣しているという、相互性の欠如が漂っている。ここでの時間の経験は往復的である。つまり、対象表面の官能的な性質にひきつけられたり、そこから離れたたりするといった振り子のような動きから成り立っている。ここには反復はあるが成長はなく、変化の無さが特徴といえる。自閉的な子どもの中には、テレビのコマーシャルや公共空間のアナウンスを、一字一句間違えることなく、繰り返し唱えることが得意なものが多い。彼らのフラットな発話を聞いていると、言葉がどんなに繰り返し唱えられても、何かが蓄積されている感覚や達成感

を味わっているようには見えない。むしろ変わらず繰り返されるという、変化の無さが安定感を生んでいるように見える。ポスト自閉症残遺状態 (Meltzer et al., 1975)、すなわち、自閉的な傾向のある者は、この2次元的な世界に生きていとされる。

そして、3次元的な世界では、立体的な空間が形成される。自己や対象には奥行きがあり、表面の向こう側に目に見えない内部が存在する、という考えが形成されることで、初めて投影同一化が可能となる。ここでの時間の経験は循環的であり、昼と夜のように前後はあるものの、結局同じところにもどってしまう。自己の受け入れがたい部分を押し込む対象は存在するが、一時的に不快感から開放されるだけであり、報復の恐怖が待っている。被害妄想的な統合失調症や、対象への理想化、価値下げを繰り返す境界例といわれる人々の心的体験は、主にこの3次元性によって理解できるだろう。

最後の4次元とは、3次元的な立体空間に加えて、過去から現在に向かう連続する時間の流れを伴う世界である。ここに取り入れ同一化が成立し、良い対象が内在化される。一方向にしか流れない時間の流れを生き、対象への罪悪感や、償いの気持ちが体験される。これが神経症者の生きている世界である。

#### 4. 臨床素材

次に、2つの臨床素材を提示し、主に神経症的な水準で機能している児童と、自閉的な傾向を持つ発達障害児童とで、箱庭の使用法とプレイがどのように異なるのかを示し、心的次元論の理解を深めたい。各症例ともに、箱庭を使用した連続する2回のセッションと、その後のプレイセラピーを提示する。

なお、各症例の記述においては、プライバシー保護の観点から、本質的な理解を妨げない範囲

で修正を加えている。

##### (1) 症例 A

A は5歳男児。Aの母親は、人に迷惑を掛けるようなことは口にするのはおろか、考えることすら許されないという信念を持っている人であった。父親は、多忙で不在がちであり、Aは母を支え、母の期待に沿った優しく理知的な子どもとして生育していた。そんなAは、小学校入学前に運動チックを呈するようになり、心理療法導入となった。

##### セッション1

心理療法開始から2ヶ月ほどが経過。Aはチックを頻発させながら、自分が持っている玩具の説明に熱中するセッションが続いていた。その間、Aのチック症状は頻尿に移行していた。

面接室で話を始めると、ほどなくトイレへ中座し、排便。その後、Aは「これとこれとこれが好き」と言いながら、東京タワーとクジャクを持つ。箱庭を示すと「やってみる」と意欲的。タワーを埋めて、表面の砂を払って見つけ出す。「発掘。宝探している」。また、クジャクを埋め、羽だけ見せて「本当はきれいなんだよね。お花みたい」。

小さな人形、犬などを埋めては掘り出す。「砂きれい?」と尋ねるので、「汚いといやだな、と思ったのかな?」と答えると、「うん」。砂の感触を確かめるように、ぎゅっと握ったり、ぐっと両手を埋めたりする。

続いて、「顔を洗ってみよう」と両手に砂を救い上げて顔にまぶす。同じようにやってくれとせがまれて、セラピストがやってみると、眉毛に砂がつき、Aはそれを見て笑う。

さらにAは、顔ごと砂に押し付ける。やはり同じことをセラピストに求める。Aは「気持ちいいよ。毛布みたい」と言う。

## セッション 2

前回のセッション後、A は胃腸炎に罹患。面接室につくと、A は馬の玩具にまたがり、「パパが乗っても大丈夫」などと語る。

やがて、箱庭へ。しばらく砂をいじっている。前回同様、顔を洗うように砂をつける。やがて立ち上がり、「おもちゃ撒き散らしていい?」。A は、柵から犬のフィギュアを何頭か両手に抱え、砂の上に投げ出す。

しばらく砂を犬にかけて埋めている。「この前来たとき、A はいっぱい遊んでいた。普段は我慢しているのかもしれないけど、この前はいっぱい遊んでいた。それで、どれくらい我慢したらいいのか、どれくらい好きにしているのか、ちょっとわからなくなってしまって、不安になってしまったのかもしれない。A はおなか壊しちゃったみたいだけど、いっぱいうんちがでたら、どれだけたくさんうんちをしたらいいのか、どれくらい我慢したらいいのかわからなくなって、不安になっちゃったのかもしれない。でも、いっぱい遊んだのは楽しかったんだろう」と伝える。A は黙って砂をかけている。

A は、おもむろに砂に顔をうずめる。顔が砂だらけ。「一気にいった」と犬に砂をかけてうずめる。「これくらいの犬だと一気にいける」。

やがて彼は犬の人形のお尻の穴に砂を注ぎ始める。そして、ひっくり返して砂を出す。「おしっこみたい」と A。「そうだね。でも水じゃないから、うんちみたいかもね。下痢のうんちみたい」と伝える。

A は答えず、しばらく繰り返す。そして、「うんちがいっぱい」とうれしそう。砂を排泄しては、犬のお尻に砂を注ぎ込む。そして、もう一匹の犬を指して、「どっちが先にいっぱい入れられるか競争」と誘う。

一緒に静かに砂を注ぎ込む。チックは全く出ない。

## セッション 3

心理療法開始から2年ほど経過した時点でのセッション。

A はミイラの操り人形を持参している。すぐに「町を作る」と言って、机の上に動物や人のフィギュアを並べる。高波の下にクジラを置き、カバは滝にうたれている。そして、火山にワシが乗っている。A は人をビルの上に乗せては「自殺しようとしている」と言う。

A は、持参したミイラをひっくり返す。人形の手足はぶらりと垂れ下がり、A は「クモに変身する」と説明。

消防士が火山に向けてスタンバイ。子どもは誘拐されそうになるが、警察署が目の前にある。そして、誘拐犯の目の前には男性が立ちはだかる。男性のこぶしが誘拐犯の顔に向けられているので、「パンチしているみたい」と伝えると、A はこぶしを誘拐犯に触れさせて殴らせる。すぐに子どもの後ろに包丁を持った肉屋が「殺人犯」として控える。ビルの上からは人が落ちて、あっけなく「死んだ」。ビルから落ちた人は救急隊員によって担架で病院に運ばれるが、担架が倒れて救急隊員が医者に怒鳴られる。

A は「ミイラは英語でマミーって言うんだよ」「マミーって飲み物ある」と言うので、甘ったるいミルクを連想しながら、「あの甘いやつね」と答える。

その後 A は「相棒」と言いながら部屋の奥に向かい、玩具の馬にまたがって出てくる。A は引き出しを開けて、A 専用のスケッチブックを取り出し、眺める。A はそこに新しい絵を描き加える。ドラえもんが誘拐されそうになっているが、すぐに警官が駆けつける絵。

「悪いことをするとすぐ捕まっちゃうんだね。これじゃ好き勝手にできないね」「君はこの部屋に来ると、やんちゃをしたり、物を壊したりしたくなるけれど、それはいけないことだと思う

んだらうね」と解釈。すると A は、馬の耳の間にミイラをひっくり返して挟み「落ちない」と言及した。A が「ミイラをひっくり返したのはマミーって名づけよう」と言うので、「マミーってママ、みたいだね」と伝える。

その後、A は箱庭の蓋を開けて、犬とワニを入れる。そして、山を作って犬に登らせる。山の中に隠れていたワニが出てきて、犬を引きずり込んで食べてしまう。他に入れた魚も、ワニに引きずり込まれては食べられる。そこにゴリラが登場する。ゴリラは、ワニを捕まえて食べてしまう。そして、ゴリラが犬を助けるかと思うと、犬も食べてしまう。

「悪いことをすると、ゴリラがやっつけてくれるけど、ゴリラは良い子も食べてしまうんだね。君は普段よい子だけど、悪いことをするのはいけない、ととっちめる部分があるみたい。でも、その部分は、良い子の部分もとっちめてしまうんだね」と伝える。

終了時間になる。A は「お片付けやっついて」と命令し、「この後誰が来るの?」と気にする。

### 考察 1

A が呈する運動チックという症状は、肛門期的、尿道期的な衝動コントロールの問題として理解できる。A の神経症症状は、衝動を「出そうか出すまいか」葛藤していることから生じていると言える。

さて、A は箱庭を使用したセッションの初回、砂のなかに男性的な象徴を埋没させ、それを取り出す、という遊びを行った。A は箱庭を立体的な空間として認識し、そこに、自分の自己の一部を投影した。そして、失われた自己の一部を再び自分のものにしたい、という欲求を表現したと言える。続いて A は、自分自身を箱庭の中に埋没させ、砂と戯れる。これは砂にまみれると言う形で、肛門期的な衝動に身を任せ

たと考えられる。加えて、先ほど埋めた東京タワーやクジャクと自らを重ね合わせたと考えれば、男性的象徴との同一化としても理解できる。次のセッションまでの間に、A は身体症状を呈するが、それは、A の肛門期的な衝動が高まり、制御困難になってしまったためだろう。

続くセッション 2 での A は、カウボーイさながらの男性らしさの自己顕示や、砂と戯れたり「玩具を撒き散らす」といった肛門期的な衝動が喚起されている。A に対して、衝動を解き放ちたい欲求と、一度たがが外れるとコントロールができなくなる不安について解釈すると、A は一気に衝動に身を任せる。そこから A は、犬の人形を使用して、尿道期的、肛門期的な衝動をあらわす。おしっこやうんちという表現はきわめて具体的だが、実際に排尿、あるいは排便するのではなく、人形と砂を使用することで、象徴的にそれを展開することが出来ている。

最後に提示したセッションで目立つのは、高波や火山などの、激しい衝動性の現れである。A はセラピー開始前までは、チックを除き、自らの衝動性をほとんど表に出すことは無い子どもだった。しかし、セラピーをはじめ、A は徐々に積極的で活発となり、母親の期待を裏切る子どもになっていった。

A が作り上げた町は、A の内的対象世界であり、登場する人形達は A の内的対象である。大自然の猛威と野生動物によってあらわされているのは、A の本能衝動の世界と言える。生の本能と死の本能は争っているが、生き生きとしたエネルギーに満ちている。この世界で、A の子どもの部分は、ビルの上の人物像や、誘拐されそうな子どもに現れていると言えるだろう。これらは、危機的状況にある。それは何故か。

A のあらわす内的対象世界は、警察官や医者によって秩序を保たれている。しかし、遊びを通じて表現されているように、取り締まる側

は非常の暴力的であり、救いがない。つまり、Aの超自我対象があまりに激しすぎるために、生きるためのエネルギーが押さえ込まれているのである。

ここで、Aが「ミイラ＝マミー」に言及したところは意義深い。Aは、甘すぎるミルク＝母親の対象の生み出すものが、ミイラでもある、ということにどこかで気付いているのであろう。つまり、ミルクが生命の源よりも死に近い、という意味である。

さてAは、セラピストの「甘いやつね」というコメントに込められた、侵入的なミルクという連想を無意識的にキャッチし、馬＝父親の対象の力を借りて颯爽と帰ってくる。そして、描画を通じて、Aの内的対象世界の問題、すなわち、衝動的な部分を取り締まる超自我、というテーマを繰り返した。更にセラピストが、衝動性とそれに伴う不安を解釈したところ、Aは改めて、ミイラ＝マミーという理解を示した。

その後Aは、砂山＝乳房の中にある、貪り食う超自我対象によって内的対象世界が混乱しているという、Aの抱える問題をより生々しく表現した。Aにとっては、厳しすぎる超自我によって、生き生きとした部分が押さえ込まれてしまうことが、衝動の表出を力づくで押さえ込もうとする症状形成に繋がっていたことが理解できるだろう。

## (2) 症例 B

小学校2年生の男児Bは、初歩、初語ともに1歳前であったが、1歳半頃から言語発達の遅れが見られ、2語文が出たのは3歳以降であった。家庭環境は家族成員の病気が相次ぎ安定しなかった。

Bは学友から意地悪をされていたが、Bは学友について「また優しくなってくれたら仲良く遊べる」と何の衒いもなく語った。また、Bは

とても小さな声でしか話さないで、ほとんど聞き取れなかった。これらの問題を心配した親に連れられて医療機関を受診したBは、医師から自閉的傾向のある発達障害と診断された。そして、医師からの紹介で心理療法導入となった。

### セッション 1

心理療法開始から2ヶ月ほどが経過。それまでBはセラピストを遊びに誘いつつ、実質的にはほぼ1人遊びに近い遊び方を続けていた。

面接室に到着し、Bは「漢字を砂に書くのをしよう」と箱庭のふたを持ち上げる。Bの説明は聞き取り困難な小声であり、言わんとなることがなかなか理解できない。どうやら、1文字ずつ交互に書いて、2字からなる熟語を完成させるルールのようなのである。

Bはセラピストの名前と、医師の名前とを間違えて呼ぶ。Bが「大」と書いたあと、セラピストは「人」と書き足し、「大人」という熟語を作る。さらに、「体育」「公園」などの言葉を作っていく。

その後、プラレールを丸くつないで、ビー玉を転がす。それぞれ2色ずつ持ち玉があり、コース上を転がすのだが、競争なのか、ぶつかり合いなのか、よく分からないルール。外に飛び出たり、ぶつかったりしたときに、ちょっとした盛り上がりがあるのだが、脈略は乏しい。

Bは、徐々にレールを増やし、楕円のサーキットになっていく。長くなればなるほどコース内で玉の勢いがなくなり、何度も指で弾かなくてはならない。なんとなく間延びした感じがするのだが、Bは熱中しているように見える。

### セッション 2

前回のセッションのあと、Bが家庭内で「荒れていた」という報告がなされた。Bと面接室



へ。Bは箱庭の蓋を1人で開けようとして、手がすべる。「すべり、みたいです」と言う。Bは砂の上に「力」と書いて、何か書き加えるように促す。セラピストは前回同様、熟語を作るものだと思って、「強」と書き足すと、「ああ」と言うBの声色から、どうやらBの思惑とは違ったらしい、と察しがつく。

Bが次に「五」と書く。セラピストが自分の名前を連想すると、Bはセラピストの名札を見る。口を書き加え、「吾」という漢字を書くと、Bはわが意を得たり、という顔をする。今回は熟語ではなく、1つの漢字を作る狙いがあったようである。

その後、Bは漢数字の一から九まで書く。そして、箱庭を二分割し、セラピストに木々を植えるよう促す。セラピストは森の中に桜が咲いている風景を作る。Bは自分の領域に木々をちりばめ、そこに動物を加え、戦いを始める。ガゼルがヒョウに襲われ、ヒョウをバイソンが倒し、バイソンをワニが倒し、ワニをライオンが倒す。

セラピストにも動物を動かすよう促す。そして、ワニやヒョウをセラピストの領域に投げ込む。やがてセラピストの領域にもBが入ってきて、戦いを始める。セラピストは自分の領域がなくなり、所在無く、傍観者の立場におかれる。

Bは「邪魔ですね」と最初に植えた木々をどかす。「がけを作りたい」と言いながら砂を盛り上げる。空間を二分して、肉食動物と草食動物との戦いになる。肉食動物が草食動物に襲い掛かり、圧倒的に肉食動物有利の展開。

「荒れている、とお母さんが言っていたけど、君とお母さんの間でも闘いがあったのかな」と伝え、「忘れました」と答える。Bはしばらく闘いを続けた後、静かに片付ける。

やがて、Bは引き出しにある太鼓を見て「堀

江先生太鼓好きなんですね」と言う。

動物フィギュアを手を取ったところ、偶然足が外れる。すると、それをきっかけにいろいろな動物を分解しては組み立てる。「こうやって組み合わせるから大丈夫です」とB。

やがて引き出しを開けて、「堀江先生太鼓が好きなんですね」と繰り返す。「好き」という情緒的な表現が極めて珍しいので印象に残る。「君はどうなのかな？」と尋ねると、Bは太鼓を取り出し、セラピストに持つように促し、叩く。その後机の上において叩く。決して上手ではないが叩き続けるBを見て、「太鼓が好きみたいだね」と伝え、「太鼓が好き……」とフラットな口調で繰り返す。

### セッション3

心理療法開始から1年半ほどが経過したセッション。この日は、セラピストの都合で開始が5分遅れる。遅れたことを謝罪しBと面接室へ。Bはすぐ言葉のパズルを取り出す。セラピストが「僕がこないかと思った？」と尋ねるが返事は無い。

セラピストはBに呼びかけようとして、Bが名前で呼んで欲しい、と前のセッションで言っていたことを思い出す。「Bは友達と仲良くなりたいとここに通い始めた。この前、名前で呼んで欲しいって言われて、君はきっと僕と仲良くなりたいと思っているんだろうな、と思っていた」と解釈した。

特段返事は無かったが、Bは言葉のパズルで、「まいど」という単語を作って置いた。更にBは、「とも」という言葉も置く。そして、セラピストが「うし」と置いたそばに、Bもまた「うし」という文字を並べた。

その後のサッカーゲームでは、序盤はBが優勢。しかし、セラピストが逆転すると、Bはセラピストの人形を一つもぎ取って、頭を痛め

つけた。そして、強引に同点に持ち込み、更に人形を全部もぎ取り、セラピストのゴールにシュートを押し込んだ。

「さっき逆転されて悔しかった。どうしても負けたくなかったんだろうね」と伝えるが、Bからの返事は無かった。

続いて、黒ひげ危機一髪。Bはいつも通り、全く怖がる様子無く剣を突っ込むので、セラピストだけがひやひやする。しかし、Bが黒ひげ飛び出させてしまい、苛立った様子になる。

Bは片付けようとして、「入れるから持ってきて」と袋を筆者に持たせ、そこに剣を流し込むように入れる。剣はあふれ出し、床にこぼれた。「負けてくさくさした気持ちを僕に投げ込んでいる。負けるのがとても悔しかったんだろうね」と伝える。

返事は無かったが、Bは続いてとても楽しそうにかくれんぼに興じる。そして最後にオニごっこをする。セラピストがオニになって、Bを追いかけ、Bは一生懸命逃げる。とても興奮している。いつもであれば、セラピストにつかまりそうになると、すんでのところで「降参」と言って中断してしまうのだが、このセッションでは降参しない。そして終了時間を告げると「勝った」と喜ぶB。

## 考察2

Bは箱庭を使用したセッションの初回、箱庭の砂に字を書く、という遊びを行った。これは箱庭を立体として体験せず、表面の砂としか触れ合わない遊び方である。しかもBが誘った熟語作りは、漢字2つの結びつきに意味があるにはあるが、作られた言葉は、書き取りの宿題にでてくるような熟語であり、広がり乏しい。セラピストと主治医の名前を混同することにもあらわれているように、呼び名は認識しているが、その背景にある人となり、その人の独自性

への関心は希薄である。その後のビー玉転がしは、スタートもゴールもなく競争にならない。ここで重要なのは、同じコースを何度も何度も周回することにあると言える。

続くセッションでは、再び箱庭の砂を使用し、2つの漢字をつなげる遊びに誘う。セッション1との相違は、文字自体の距離が縮まっていることと、セラピストの名前から1字を使用するというかたちで、名前が単なる記号ではなく、持ち主である特定の人と結びついたものとして体験し始めていることである。

さらにBは、箱庭を舞台として使用し、動物の人形を用いた遊びを展開する。まだ平面的な使用法だが、箱庭を2分割することで、自分とセラピストの2つの領域が分離し、セラピストの領域に自分の一部を投げ入れる、という投影に近い動きも見受けられる。ただし、すぐにセラピストの領域はBの領域として組み込まれ、対象と自己との分離は維持できなかった。

その後Bの展開した戦いのシーンを、セラピストはBが母親との間で体験した情緒的経験の表現として解釈した。Bは芳しい返事をしなかったが、直後のBの「堀江先生太鼓好きなんですね」という発言は注目に値する。当初セラピストは、Bの言葉を受けても内的に喚起される情動は何もなく、ただ、自分が感じている情緒を貼り付けられたように体験した。しかし、Bが太鼓を叩き続ける様を目にしているうちに、その音と共に、Bの熱意のようなものが響いてきた。つまり、「堀江先生太鼓好きなんですね」という言葉は、Bによる2次元的な形式での投影の元基と言える。

最後に提示されたセッションにおいて、Bは引き続き言葉をテーマにした遊びを展開している。Bからの「名前を呼んで欲しい」という求めを受け、Bの親しくなりたい気持ちを解釈すると、Bはそれに呼応するように「まいど=毎

度」という親しげな挨拶を連想させる言葉を作った。続く「とも＝友」という言葉も、まるで解釈を裏書するような反応である。さらに、セラピストの言葉をなぞるかのように同じ言葉を作り、傍に置いた。セラピストを分離した独自性を持つ対象として認識しつつ、親しみを感ずるようになったと理解できる。

しかし、セラピストとの結びつきが強くなれば、それだけBは自閉的な世界から出てしまうことになり、セラピストという外的対象の思い通りにならない部分に出会わざるを得ない。そこでBは、怒りに任せてセラピストの人形を破壊した。このあと興味深いことは、Bが玩具の剣をセラピストが持つ袋に注ぎ込むと言う形で、苦痛な情緒をセラピストの持つ袋に投げ込んだことである。ここに、3次元的な心の芽生えが見て取れる。

さらにBはかくれんぼ、オニごっこといった、対象との距離を楽しむ遊びに興じることが出来るようになった。それまでBは、オニごっこで対象との距離が近づきすぎると、耐えられずに中座していた。それはおそらく、Bの心の一部が、対象と自己との直線的な関係性しかない、1次元的な心的世界に生きていたためだろう。1次元的な対象との融合が生じることは、自己の消滅につながる。

しかし、セッション3でのBは、時間終了までセラピストという対象との距離を楽しめた。これは、Bが自己と対象との分離を自らの心のうちで収容する立体的空間を内在化できた証と言える。

## 5. 最終考察 ツールとしての箱庭と心の次元論

AもBも、箱庭に自らの身体を接触させている。しかし、その体験様式は全く異なっていることが明らかになった。Aは砂の感触を味

わい、砂の中に自らの身体を埋没させたが、Aにとって箱庭は、自己の一部を投げ込んだり、また取り戻したりする奥行きのある空間である。しかも、解釈によって不安が軽減すると、さらなる衝動が遊びの中に展開する。面接と面接の合間という分離の経験によって、一時的に不安は亢進するが、その不安を解釈されることによって、自由度が増し、衝動が発現するとともに、より象徴的な表現が可能になっている。ここには、セラピストの理解を取り入れるという、取り入れ同一化のプロセスが生じていると言える。このように、経験を通して学ぶことができるためには、過去から未来に向けた時間の流れが体験される必要がある。Aは一貫して4次元的な空間を生きていると言えるだろう。

一方Bは、同じ箱庭を、最初は簡単に書いては消せる画用紙の代替品として使用している。これは極めて表層的、2次元的な位置づけである。そもそもBが学友に対して抱いている認識も、非常に表層的である。Bの語るところからは、まるでカードの表が出れば良い学友、裏が出れば意地悪な学友、といった類の認識しかなされていないことがわかる。このような体験様式は、2次元的な空間に対応した、振り子のような往復的な時間体験としても理解できる。もしBが、3次元的、循環的な時間経験を生きていれば、「信じていたのに裏切られた」とでも言うような、対象の移り変わりに対する不安や不信感を経験することが出来るはずである。

さて、そんなBであっても、対象との関係性が独特な様式で発達していることが見て取れるだろう。セッション1からセッション2、そしてセッション3に進むにつれて、Bの心は2次元的心性から3次元、一部は4次元的な心性を経験出来るようになっていく。

このように、箱庭は様々な次元に対応した心的世界の表現媒体となりうる。それは箱庭自体

が幅と奥行き、そして高さと言う3次元的な特質を備えているからであろう。だからこそ、それを2次元的に使用することがことさら独特な表現方法としてセラピストの目に映るのではないだろうか。そういった意味で、箱庭は、子どもが生きている心的次元をアセスメントするツールであり、プレイセラピーを通じてその心的次元が変化する様相を浮かび上がらせる貴重な媒体と言える。

ただし、投映法の心理検査が、全ての人々の心的表現を引き出すだけでなく、検査の道具によって向き不向きがあることが知られているように、箱庭もまた、人を選ぶ、あるいは人に選ばれる媒体であることは確かであろう。神経症水準の児童、成人であっても、箱庭を忌避する場合は少なくない。加えて、箱庭を満たす砂が、衝動統制の困難な児童にとっては、魅力的過ぎる素材であり、撒き散らしたり、投げつけることで、心理療法とその枠組みに対して破壊的になる可能性も考慮する必要があるだろう。そういった児童に対しては、あらかじめ箱庭を目に付かないところに移動する等の配慮が必要なのは、水や絵の具、粘土などの使用にも通じるところである。

提示した2つの臨床素材は、心的次元の水準、および健康度の高さからみて両極端にあると言えるかもしれない。しかし、神経症水準の子どもであっても、自閉的傾向を有する発達障害の子どもであっても、真実のもたらす心の痛みを引き受けることは、当事者にとっては容易ではない。そして、人の心は傍らでその人について思いを馳せる誰かの心に宿るところから始まる。これは心理療法のプロセスの中で、あるいは子どもを養育する中で、実感をもって感じられるところではないだろうか。心が、一人の人の内部に帰属すると感じられるようになるのは、時間をかけて繰り返される情緒的なかわりに

よるひとつの達成と言えるだろう。

## 参考文献

- Bion, W. R. (1959) : Attacks on linking. *International Journal of Psycho-Analysis* 40 : 308-315 中川慎一郎 (訳) 1993 : 連結することへの攻撃。メラニー・クライン・トウディ ①。岩崎学術出版社、東京、pp 106-123
- Cassese (2001) : Introduction to the work of Donald Meltzer. Edizioni Borla, Italy. 本部則雄・脇谷順子 (訳) 2005 : 入門メルツァーの精神分析論考 岩崎学術出版社、東京。
- 福本修 (2005) : 心的外傷の行方—病理的組織化と次世代への負債。埋葬と亡霊—トラウマ概念の再吟味。人文書院、京都。
- Freud, A. (1922-1935) : Introduction to Psychoanalysis : Lectures for Child Analysts and Teachers. The Writings of Anna Freud. Vol. I. International Universities Press, London. 牧田清志・黒丸正四郎監修、岩村由美子・中沢たえ子 (訳) 1981 : アンナ・フロイト著作集1。岩崎学術出版社、東京。
- Frued, S. (1912) : The dynamic of transference. *Standard Edition* XIII 小此木啓吾 (訳) 1970 : 転移の力動性について 『フロイト著作集第9巻技法・症例篇』 人文書院、京都、pp 68-77
- Frued, S. (1914) : Remembering, repeating and working-through. *Standard Edition* XIII 小此木啓吾 (訳) 1970 : 想起、反復、徹底操作 『フロイト著作集第6巻自我論・不安本能論』 人文書院、京都、pp 49-58
- 河合隼雄 (1969) : 箱庭療法入門 誠信書房、東京。
- 本部則雄 (2006) : こどもの精神分析 岩崎学術出版社、東京。
- Klein, M. (1923) : Early Analysis. The Writings

- of Melanie Klein Vol. I, The Free Press. 堤啓（訳）1983：早期分析。メラニー・クライン著作集1。誠信書房、東京。
- Klein, M. (1946) : Notes on Schizoid Mechanisms. The Writings of Melanie Klein Vol. IV, The Free Press. 狩野力八郎・渡辺明子（訳）1985：分裂的機制についての覚書。メラニー・クライン著作集4。誠信書房、東京。
- Meltzer, D., Bremner, J., Hoxtee, S., Wedell, D., & Wittenberg, I. (1975) : Explorations in Autism. Clunie Press, London.
- Rosenfeld, H. (1971) : Contribution to the psychopathology of psychotic states : the importance of projective identification to the ego structure and the object relations of the psychotic patient. In Problem of Psychosis, ed. P. Doucet and C. Laurin, PP. 15-128. Amsterdam : Excerpta Medica. 東中園聡（訳）1993：精神病状態の精神病理への寄与 精神病患者の自我構造と対象関係での投影同一化。メラニー・クライン・トウデイ①。岩崎学術出版社、東京、pp 142-166